

世界をみつめて3

旧石器ねつ造事件（2）～層位学と型式学的研究～

南 博史

宮城県上高森遺跡における藤村新一氏による前期・中期旧石器ねつ造は、「発掘が進んでいるところに事前に石器を埋めて後から発見する」という単純な方法で行われていた。研究者の倫理観を信じていたことが根底から覆ったのである。つまり、層位学的に正しく発掘をしても、また石器が発見された土層を挟む火山灰の理化学的年代を計ってみても、その土層に故意に埋められたとしたら、その攪乱（かくらん：堆積後の時代のさまざまな活動によって、オリジナルな土層に新しい土、また新しい時代の遺物が混じってしまうことを指す）を他の調査者が発見できなかったとしたら、当然その石器は自動的にその時代の遺物になってしまう。

もちろん、発掘調査は一人でやっているわけではない。大学などの研究者も調査員として加わっていた。藤村氏が掘れば石器が出ることから、「ゴッドハンド」とまで称されるようになった氏に対しての多少の疑念も、「周りにあれだけの専門家が一緒に調査し、実際に出土しているのだから」という発言が、他の研究者からもしばしば聞くことができた。

多くの発掘現場で一般の見学者の方々としばしば交わされる会話を復元してみよう。

見学者：「この土器が、どうしてこの時代のものでしょうか？」

調査者：「土器の作り方、形や模様からもわかる場合があります。また、その土器が発見された土層の年代からおおよそ検討をつけることができます」

見学者：「では、私とその土層に後から別の土器を埋めたらどうなるのでしょうか？」

調査者：（満面に自信の表情を浮かべて）「後から埋めたものは必ず見つけることができますよ。考古学研究者はそうした知識も経験も積んでいますから」*

何をかを言わんや。

その後、藤村氏が関わった遺跡と石器の再点検が、日本考古学協会や遺跡を管理する各地方自治体の教育委員会によって行われ、氏がかかわったすべての遺跡と当該時代とされた石器が故意に埋められたもの、あるいは石器ではないと結論された。ねつ造は25年間、約180遺跡におよぶ。その影響は大きく考古学

学界にとどまらない。1997年7月に国指定史跡指定された宮城県座散乱木遺跡の指定解除、教科書の書き換えにも及んだ。教科書に記載されることは定説として確定されたものだけに、その影響の大きさを知ることができる。また、こうした遺跡を観光資源として活用し、地域経済の発展に期待していた地元自治体や住民にとってどれほどの影響があったかは想像に難くない。

ねつ造発覚前、出土した石器そのものから疑問を呈した研究者もいた。こうした数少ない批判を行なった研究者の根拠の一つは、石器の型式学的研究によるものである。型式学とは、簡単に言うならば「道具」の進化論である。生物の進化と同様に、人類が作り出す道具は、その型（形態、技法、材質、文様）は元があって一定方向に系統的に変化していくという理論である。19世紀後半、スウェーデンのO.モンテリウス（1843-1921）らが確立させた。考古学は、遺物の型式学的研究と層位学的研究によって独立した学問として成立したともいわれている。

つまり、日本の前・中期旧石器については、ヨーロッパや東アジアの類例から全くかけ離れ、系統が辿れないこと。またその石器は、後の縄文時代の石器と酷似しているという型式学的研究がその根拠であった。しかし、他に類例がないのは日本で初めて発見されたからだという「期待」と発掘調査で出土するという「事実」でもって、日本独自の前・中期旧石器文化論を作りあげてしまった。学問としての考古学の「型・類例」と「発掘・事実」はジレンマでもあるのだ。

最終回は、その後の日本の考古学、考古学と社会とのかかわりについて触れてみたい。

※30年以上発掘調査の現場にいた筆者自身の発言である。また、前職の京都文化博物館では「ヒトの来た道」という前期・中期旧石器も取り上げた展覧会を開催した。各地の博物館もまたこのねつ造によって批判の矢面にたった。

みなみ ひろし（教授・考古学）